

18—20世紀，ウイグル族の度量衡について

堀 直

はじめに

A

現在の中国新疆ウイグル自治区の南部は、1760年、清の支配下に編入され、以降「回疆」と呼ばれるようになった。18世紀以降のこの回疆の歴史については、以前の「西域史」とは異って社会・経済史的な視点からのアプローチが試みられており、多くの蓄積が得られている。

しかし、その地域住民——Türki, 纏回, と呼ばれていた現在の Uighur 族——の社会生活の実体にまで至ると、不明なままに残されている点が多い。本稿で取扱う度量衡単位の問題も、それらのうちのひとつである。前近代の極めて地域格差の大きい度量衡単位ではあるが、とにかく何らかの見とおし、——どのような特色を持つ、どのような単位が、当時のウイグル社会で使われていたか——をつけることが、本稿の目的である。

ただし、筆者の無能と資料の不足の為に、各単位呼称の絶対値を確定することはほとんどできなかった。将来に、W. Hinz 氏のイスラム世界の度量衡研究のような労作が出現する為の一資料にでもなれば幸いである。

B

手法的な前提を若干述べておく。ウイグル族自身の残した記録のうちで、度量衡の体系を整理したものを、筆者は知らない。この点、外来者——征服者としての清朝官吏やその他の旅行者——の記録には纏った叙述をしているものが多い。それ故、彼らの記述——辞書の類も含めて——に拠ってウイグル族の度量衡単位を抽出し、ウイグル族の残した史料によって確認していくことにする。また、各種の単位を大略、18世紀以前から使用されていたものと、それ以降にウイグル族社会に伝入したものとに分けて述べていくことにする。

C

本稿中でしばしば用いる資料は以下の略号に従う。

五体. 田村實造氏等編『五體清文鑑譯解』上・下。京都、1966・68。各語彙の通し番号に従って記す。

回疆志. 永貴撰，蘇爾德補『回疆志』4 vols. 1760年代著。京都大学文学部所蔵の抄

本に拠る。

張之毅. 張之毅『國立中央研究院西北科學考察團報告 新疆之經濟』上海, 1945。

維漢俄. 鮑爾漢『維漢俄辭典』北京, 1953。

Beveridge. Beveridge, A. S., *The Babur-nama in English (Memoirs of Babur)*, translated from the original Turki Text of *Zahiru'd-din Muḥammad Bābur Pādshāh Ghāzī*, London, 1922. 本稿では, New Delhi, 1970 の Reprint 版に拠る。

Brockelman. Brockeman, C., *Mitteltürkischer Wortschatz, nach Maḥmūd al-Kāshgarī's Diwān Luḡāt at-Turk*, Budapest, 1928.

Forsyth. Forsyth, T. D., *Report of a mission to Yarkund in 1873 under command of Sir T. D. Forsyth*, Calcutta, 1875. その第12章 (PP. 494—495)。は, 「Money, Weights, and Measures of Kāshghar」と題され, H. W. Bellew の筆にかかる。

Jarring. Jarring, G., *An Eastern Turki-English Dialect Dictionary*, Lund, 1964.

Kuropatkin. Kuropatkin, A. N., *Kashgaria : (Eastern or Chinese Turkestan)*. Translated from the Russian by Water E. Gowan, Calcutta, 1882.

Radloff. Radlov, V. V., *Versuch eines Wörterbuches der Turk-Dialecte*. S.-Pt., 1888ff. 本稿は, The Hague, 1960 の Reprint 版 (4vols.) に拠る。

Raquette. Raquette, G., *English-Turki Dictionary, based on the Dialects of Kashgar and Yarkand*. Lund, 1927.

Shaw. Shaw, R. B., *A Sketch of the Turki Language as spoken in Eastern Turkistan (Kāshgar and Yarkand)* Cullcutta, 1880

Steingass. Steingass, F., *A comprehensive Persian-English Dictionary*, London, 1892. 本稿では, Beirut, 1970 の Reprint 版に拠る。

Валиханов. Валиханов, Ч. Ч., *Собрание сочинений в пяти томах*, том д. Алма-Ата, 1962.

УРС. Наджип, Э., *Уйгурско-русский словарь*, Москва, 1968.

なお〔 〕は出典を, () は, 筆者によるメートル法の概算値及び補註を示し, ≡ は原義, 「」は引用を示している。

1. 長 度

A

ilik ≡手、≡指、の意味から転じたもの。16世紀初の *Bābur Nāma* にみえる [Beveridge. PP. 489 & 630]。五体 [13165] には *ilik* = 五分 or 一指 (1.65cm) としており, Radloff [I. p. 1484] の伝える如く ≡指の幅、に相当しよう。Jarring は大体 1

インチ (2.54cm) であると言う [Jarring. p.140]。ただし, Raquette は, その英・ウイグル語辞典の中で [Raquette, p. 54], Inch に相当するものとして, 中国伝来の寸「suñ」を掲げている。一方, 五体では [13167], 寸 (3.33cm) = iki ilik すなわち zilik としており, ずれがある。

gharīch [Raquette. p. 43] に, 小指の先から親指のつけ根までの長さを示す単位とある。Bābur Nāma [Beveridge. p. 489] の qārish に相当するのかもしれない。

gaz [五体, 13168] には, 尺=gadzy としている。ペルシア語で cubit (腕尺) or 24 指の幅に相当する [Steingass. p. 1087]。今世紀の報告では, [Jarring. p. 103] の45インチ=1.143mから [維漢俄 p. 562] の2尺 (66.67m) までひらきがある^①。

qāri [五体, 13170] には, 似すなわち 8 尺=iki kari (2 qāri) とあり, 1 qāri は4尺 (1.33m) に相当することになる。Beveridge は, Bābur Nāma の諸写本の対照の結果として gaz = qāri を得ながらも, qāri は約1ヤード (91.4cm) 程度であろうとしている [Beveridge. PP. 489 & 611]。13・14世紀のウイグル文書にもみえるから, イスラムの伝来とともに, ペルシア系の gaz と併用あるいは同一視されるようになったのであろう。

qūlāch [Beveridge. p. 406] では, 両手をひろげて双方の指先までの間の長さであるとしている。[五体, 13179] では, ulac'i=五尺 (1.67m) としている。[Jarring. p. 112. Raquette p. 36] の一尋や, [維漢俄 p. 454] の五尺はいずれも, 旧来の制度の存続を伝えている。

qadam アラビア語の 一步 に由来するこの語は, [Jarring. p. 235] 等に見えるが, Bābur Nāma には, 長さの一種として言及されている。すなわち, 1 qadam =1.5 qāri であるとし, Beveridge は36インチと註を付けている [Beveridge. p. 630]。当該時期のウイグル族の実用の例は判らない。

qlauk [張之毅 p. 87] のみに, 後述の 1 yol = 360 庫拉克 Qulak とみえる。約 1.13 ~1.20mに相当するらしい。とすれば大体 qāri と等しいことになる。実際の用例を未だ見ていないので, あるいは qūlāch と同じとも考えられる。

tānāb 本来は 繩 を意味する。[Forsyth p. 495] には, 46ヤード 2.4 インチ, (42.67 m) とするが, 実用例をみない。

yōl 道 の原義を持ち, 長さの単位の中でも, 距離単位に属する。長くなるだけに, 諸資料間には二種のずれがある。一つは, これを qūlāch の 360 倍として説明する

〔Raquette. p. 138, Jarring. p. 158〕であり, 今一つは, これを cubit = gaz の360倍で説明する〔Mir Izzet Ullah, Travels beyond the Himalaya, JRAS, 1848, vol. VII, pt. 2, p. 306, note. 4〕あるいは, 由来不明の qulak の360倍とする先掲の〔張之毅, p. 87〕である。絶対値についても, 〔Ullah. ibid.〕の 1 mile = 2.5 yöl すなわち (1 yöl = 0.64km) から, 〔維漢俄 p. 655〕の記す 1 yöl = 一里即ち 0.5 km, 更には〔張之毅 p. 87〕の 25yöl = 7.5 ~ 8 km から得られる, 1 yöl = 300 ~ 320m までのひらきが存在する。注目すべきは, Валиханов や Shaw がこの yöl について, 「中国里 (すなわち 0.5km) のウイグル族の呼称」と説明していることである〔Валиханов. p. 412. shaw. II. p. 205〕。

tash 本来は 石 の意味で, 転じて mile stone を示し, ペルシア語の sang あるいはアラビア語の farsakh と等しく, 約 5 マイル (8.05 km) に相当すると言う〔Shaw. II. p. 63〕の説明がほぼ妥当であろう。更に付け加えるならば, 16世紀以来の中央アジアトルコ系諸民族の用いた距離単位 yāghāch も, また転じて, 約 8 km を示すこの tash と結びついていたのである〔維漢俄 p. 609〕。この tash については, 実用例—文献史料の上で一は豊富に存在する。

B

以上に述べた, 伝統的—18世紀以前からウイグル族の用いていた—長さ単位は, 一応, 辞典の上のトレエイスで, 今世紀までの存続を確認できた。それでは, 18世紀以降のウイグル族の実生活でのあり方はどうであったのだろうか。不幸にして, 18世紀中には彼らの長さ概念についての文献が残されていない。これについては, ようやく19世紀半ばに至って Валиханов が伝えてくれている。彼は, 1858—59年に, カーシュガル・ヤールカンドに滞在したのであるが, 「長さを測るのには, ロシアの аршин (71.12 cm) と半 аршин (35.56 cm) の中国の чиз (尺) を使っている」と言っている〔Валиханов. p. 412〕。ここには, 先述のウイグル族の伝統的長さについては何ら述べられていない。1970年代にこのウイグル族の地に至った Куропаткин は, 長さ単位としてロシアの arshin が用いられており, カシュガリアの住民は約 2 分の 1 アルシン (35.56 cm) の木製定規を使っている, と報告している〔Kuropatkin. p. 66〕。これらの情報—すなわち, ロシアの長さ, 中国の長さとの併用—を, より徹底して体系化しているのが, 1873年の Forsyth Mission の記録である。その記録の中では, ウイグル族の長さ単位の体系として以下の様に述べている〔Forsyth. p. 495〕。

$$10 \text{ li} = 1 \text{ fúng}$$

$$10 \text{ fúng} = 1 \text{ sóng}$$

$$20 \text{ sóng} = 1 \text{ archin} = 28 \text{ inches English}$$

$$60 \text{ archin} = 1 \text{ tanáb} = 46 \text{ yards } 24 \text{ inches}$$

更に「これらのうちで, archin は棉布の単位であり, tanáb は土地の単位である」との付記がされている。まず, li は釐を, fúng は分を, sǒng は寸を示していることは, 一見して明らかである。ここでも, やや例外的な tanáb を除けば, ウイグル族の長さ単位は顔を出していないのである。この長さにおける, 新入単位の併用・優位性は, 張之毅の現地調査の報告によっても確認される。〔張之毅 p. 87〕には, ウイグル族の長さを2種に分けて論じ, 1 tǎsh=7.5~8 km. =25 yǒl=360 qulak の系統と, 1阿爾申 arshina=2尺=2.33英尺との2系統を併記しているが, より身近かな単位が, アルシン, 尺等であったことは明らかである。新疆省成立後の積極的な中国度量衡制の定着策の結果であるとしても, 既に19世紀中に, アルシン, あるいは尺が, ウイグル族間に広く使用されていたことは, 疑いがない。その際, ウイグル旧来の長さ単位が, 里=yǒl, ilik=寸のように近似値を持つ中国式単位に吸収されて用いられていたのか, 独立して存続していたのかは判らない。

(付) **potay** は西欧旅行者の記録にしばしばみられ, 主要な街道沿いに設けられた道標に由来するものらしい。〔Raquette. p. 89〕では, 「Chinese road measure」とし, 約4 km を掲げ, 〔Jarring. p. 232〕は, 約2 miles としている。

2. 量 制

絶対量を知り得る様な容積単位の体系は知られていない。1940—41年の報告でも「ウイグル族には固定の量制がない」とされている程である〔張之毅 p. 87〕^②。

最も初期の五体には, 大石〔13366〕=tagar, 倉石〔11367〕=kapi, 斛〔11369〕=utk'arma, 升〔11373〕=k'abci, 合〔11374〕=caksa という体系を一応掲げてはいる。^③しかし, 不明の utk'arma を除き, tagar は taghar の意味で, 袋・穀物袋を意味する旧来のトルコ語であり〔Brockelman. p. 191, Jarring. p. 291 etc.〕, kapi も qap で同様に袋を意味し〔Brockelman. p. 145, Jarring. p. 238 etc.〕, k'abci は「籠子」を意味する qaps〔維漢俄 p. 483〕に相当する。最後の caksa は, 後述の chaksa のことであり衡制(重量単位)の転用とみてよい。そしてこれらのいずれもが, 一定の量と体系を持った量制単位として通用していたとは考えられない。^④

1760年代の記録にも, 「米糧の計量には升・斗はなく, 察拉克・噶爾布爾・巴特滿を以って之を計る」〔回疆志, vol. 3〕とあるように, 重量単位からの転用が一般的であったと考えてよく, 五体の記事は附会に過ぎるようである。

さて, 元来重量単位であった単位の転用の例では, 穀物の場合で, すぐ前に掲げた察拉克(charak)・噶爾布爾(ghalbir)・巴特滿(bätmān)の体系があった。八進法で, 64 charak=8 ghalbir=1 bätmān となっていた(後述)その絶対値は, 以下の様に伝えられ

ている。

chāarak [Валиханов, p. 412] は 6 chāarak = 1 ху とと, ху は斛のことで 5 斗に相当した。

ghalbir [欽定光緒会典事例, vol. 163] では, 6.625 斗。

bātmān [同上] に拠れば, 1759年には 5 石 3 斗, 1760年以降は 5 石 3 斗と定められている。後者は, [Валиханов, p. 412] の 6 chāarak = 5 斗の換算に該当するが, 前者は 7 chāarak = 5 斗に相当されていたものであろう。

液体容量については, 唯一 Валиханов が, 中国の гин が用いられており, 1 гин は 1.5 ロシア=フント (0.62kg) に相当すると伝えているが [Валиханов, p. 412], гин が斤の意味であることは疑いない。

結局, 量制に関する限り, 重量単位を容量単位とした中国的な便法の体系以外には, 実用的な面は知り得ない。

3. 衡 制

A

misqāl イスラム文化圏に変通的にみられる重量単位で, ウイグル族の場合, 15~16世紀の〔静嘉堂文庫本—所謂の三種本—華夷訳語の畏兀兒館訳語の数目門〕に, 一錢=必兒迷思力 (bir misqāl = 1 misqāl) を始めとして, [Forsyth, p. 495] の 60 grains (3.89g), [Raquette, p. 73] の 3.5g 等々。多くの記録が残されている。

ser 前掲 misqāl と同様に〔華夷訳語〕の一両 = 必兒些兒 (1 ser) 以降, [Forsyth, p. 495] の 600grains (38.89g) や [Raquette, p. 102, Jarring, p. 271] の 10misqāl = 1 sar or ser = 35g, そして [維漢俄, p. 396] の sər = 一両・ $\frac{1}{16}$ 斤との記事が伝えられている。ser は, [Валиханов, p. 412] に拠れば, 「銀や高価なものは中国式の数え方をする」例のうちの1つに属している。すなわち, 彼は, сар, мыскал, фын の10進法体系を掲げており, これらを「中国式」と理解しているが, фын(分)は除いて, 錢が misqālに, 両が ser に絶対値も10進法体系も近似・同一だった為に混同併用されていたことに由来する誤解である。つまり, 伝統的単位が中国式単位と同化していた例であり, その由来が15—16世紀以前に溯り得ることは〔華夷訳語〕から確めることができる。

nimshek [Raquette, p. 77] には $\frac{1}{8}$ chāarak とする。nim はペルシア語で「半分」の意味であるから, 半 shek を示す。[維漢俄, p. 736] では, ロシア語の部分では, $\frac{1}{4}$ чарек としながら, 中国語で 24.2 kg. としている。1 чарек は, 同書 p. 244 では 8.96 kg であるから, 2.24 kg の誤植であろう。shek は, 所謂ウイグル俗文書中の siq に由来するのかもしれない^⑤。ただし18世紀以降には ashak・ischak の類でしか例をみない。

chaksa 前章, 量制の項で言及したように, 〔五体, 11374〕では, 一合に対応されている。本来は重量単位で $\frac{1}{16}$ charak に相当する 〔Малов, С. Е., *Уйгурские наречия Синьцзяна*, Москва, 1961, p. 170, 筆者未見。維漢俄, p. 249〕。〔Jarring, p. 68〕では, ホタン地, 方では 8 sar に相当すると伝えている。実用例は未だ見ていない。

ischak 〔Валиханов. p. 412〕では, 4 чакса (chaksa) = 1 исчак で, 4 исчак = 1 чарик であるとする。〔五体, 11352〕では, 鎰 (24両) に対応して isisak が掲げられており, また 〔Forsyth. p. 495〕では, 4 jing (斤) = 1 ashak = 5 pounds (2.27 kg), 4 ashak = 1 charak = 20 pounds (9.07 kg) としている。

charak 原義は $\frac{1}{4}$ であるが, 〔Jarring. p. 66. 維漢俄. p. 244〕, 基本単位はよく判らない^⑥。当時のウイグル族の最も日常的に使われた重量単位として知られている。〔回疆志, vol. 3〕には, 1 charak = 10斤 (5.97kg) としているが, その絶対値は極めて不統一である。後述の中国伝来の斤 (596.8g) を基礎にして報告する例が多いが, 〔五体11353〕の 1 鈞 (30斤) = 1 carak を最大として, 16斤 (9.55kg.) 12.5斤 (7.46kg.) および 4斤 (2.39kg.) の三種が知られている。これらを最も明解に述べているのが 〔Shaw, II. p. 93〕で,

(i) 生糸・決めた布地, 香料, 茶などを計る charak は, 4斤 or 5 pounds 相当する。

(ii) すべての物資を計るのに用いられる ashliq tashi “food weight” あるいは tört-tash four weights” と呼ばれている charak は 12.5斤 or 約16 pounds に相当する。

(iii) 最近 (つまり1860年代末) に Amir (Yaq'ub Beg) によって導入された besh-tash five weights” と呼ばれている charak で, 16斤 or 20 pounds に相当するとしている。

やや特殊な, 最初のもの^⑦を除き, charak に2種類があったことは, 〔Kuropatkin, p. 65〕にも述べられており事実であろう。ただし, この16斤に相当する charak が, shaw の伝えるように, Yaq'ub Beg の導入なのかは, 今は判定がつかない。1940—41年の調査ではあるが, カーシュガル, ホタン区では 1 charak = 12.5斤, アクスー, クチャ区では 1 charak = 16斤と, 地域差として報告されている例があり 〔張之毅. p. 30〕, また, 対象物品の種類^⑧の相違にも帰されているからである。

いずれにせよ, 絶対値は, 〔Валиханов. p. 412〕半ブード (8.19 kg), 〔Kuropatkin, p. 65〕の16斤 = 24 pounds or 12.5斤 = 18.75 pounds の他にも, 20 pounds (9.07 kg) 〔Forsyth. p. 495〕や 12.5pounds^⑩ 〔Dutreil de Rhins, *mission scientifique dans la Haute Asie* 1890—95, Paris, 1893. t. III, p. 230〕等の諸例があるが, 〔Raquett. p. 17, Jarring. p. 66〕の伝える 1 charak = 8.96 kg. を採用している辞書が多い 〔維漢俄, p. 244. УРС. p. 381. では 8.96kg ≐ 9 kg としている。その他〕。

ghalbir 本来は $\frac{1}{10}$ の意味を持つが, 転じて一箇に入るものの重量に転じたもの。た

だし、この絶対値については、すこぶる問題が多い。18世紀の〔回疆志, vol. 3〕や、19世紀の〔Forsyth, p. 495〕及び、今世紀の〔Raquette, pp. 17, 43, 83〕等は、一様に $8 \text{ chārak} = 1 \text{ ghalbir}$, $8 \text{ ghalbir} = 1 \text{ bātman}$, の八進法的体系を伝えている。清朝の回疆治下でこの体系に従った穀物計量が行なわれていたことは、1850年頃の一現地官文書から明らかである。ところが、清朝の征服以前、すなわちホージャ期と呼ばれている時代にはこの八進法体系は穀物の計量単位としてのみ存在していたと考えられる。というのは、〔欽定平定準噶爾方略・正編の vol. 75, 乾隆24年7年庚午及び, vol. 77 の同年8月辛丑のいずれも兆惠の奏〕に、カージュガルとヤールカンドの旧来（すなわちホージャ期）の税額を報告しているが、そこでは、糧を *bātman* で、棉花・紅花を *chārak* で表示しており、両者が別体系であったとみてよいからである。*chārak* が *ghalbir* を介した *bātman* の下位の単位として用いられるのは、唯一穀物、それも多量の穀物の場合のみであったのではあるまいか。〔維漢俄, p. 448〕に、*ghalbir* を称して $\frac{1}{8} \text{ bātman} = 7.1625 \text{ kg}$. としながらも、他所〔維漢俄, p. 244〕で *chārak* を説明して「すなわち (или) *ghalbir* としているのは、ホージャ期と同様 *bātman*, *galbir*, *chārak* の八進法体系の一般性を疑わせるものである。ただし、清朝治下の穀物計量単位としての、この体系の存在は厳然たる事実であり、〔Forsyth, p. 495〕が $1 \text{ ghalbir} = 160 \text{ pounds} (72.58 \text{ kg.})$ とし、〔Jarring, p. 109〕が同じく 71.68 kg . としているのは、穀物計量上の絶対値とみてよからう。

qentār 〔Jarring, p. 244〕では約 $120 \text{ pounds} (54.48 \text{ kg.})$ とし、〔維漢俄, p. 483〕では 48 kg . とする。アラビア語起源の重量単位で〔Steingass, p. 991〕に詳しい説明があるが、ウイグル族の実用の程度は判らない。

bātman or pātman G. Clauson 氏が指摘されているように古くからの液体・固型物の重量単位である〔Clauson, G., *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford, 1972, pp. 305—06〕。同氏は、せいぜい $2 \text{ pounds} (0.91 \text{ kg.})$ 程度であったろうとするが、少なくとも15世紀まで時期では妥当であろう。ただし、この結局は由来不明の *bātman* には、18世紀以来、三系統があった様である。〔五体, 11391〕には一斤 = 1 patman とし、明代の〔華夷訳語〕等と共通している。しかし同書の別の個所では、播種量で面積を示して、 $100 \text{ 畝} = 1 \text{ patman}$ ともしており〔五体, 10964〕、この場合には少なくとも、 100 kg 以上の絶対値を持っていたであろう。〔回疆志, vol. 3〕には $1 \text{ bātman} = 640 \text{ 斤} (381.95 \text{ kg.})$ とし、〔Forsyth, p. 495〕では同じく $1,280 \text{ pounds} (580.61 \text{ kg.})$ と伝え、〔Raquette, p. 83, Jarring, p. 224〕では 573.44 kg . としている。これらは、いずれも、前の *ghalbir* の項で述べた *chārak* ~ *ghalbir* ~ *bātman* の体系に従い、*chārak* の示す重量を64倍したものとみてよい。穀物計量単位としては、この位ではあるまいか。

一方では、〔YPC, p. 238, 及び維漢俄, p. 107〕の様に、 $1 \text{ bātman} = 57.3 \text{ kg}$. とするも

のもある。単なる誤植の結果でもなく、^⑩ ghalbir の項で述べたように、基礎単位 (ghalbir を chārak の8倍とみるか、ほぼ等しいとみるか) の相違に由来する様であり、今は並記しておくしかない。

B

1876—77年に、回疆北部を巡視した Куропаткин は、この地域の基本的な重量単位は djin と charik であるとしている [Kuropatkin. p. 65]。djin は中国の斤であり、charik は前述の chārak である。しかも、彼は chārak を説明するのにこの斤を以って説明している。このことは、中国より導入された斤と旧来 chārak が整合的に用いられていたことの証とみてよい。彼にやや先行して (1873—74年)、この地域の南部を訪れた Forsyth の一行の報告では、当該地の量制を、極めて整然とした以下の表の如くに纏めている [Forsyth. p. 495]。

2 nukhud	= 1 fúng	= 6 grains English (0. 39g.)
10fúng	= 1 miskál	= 60grains (3. 89g.)
10miskál	= 1 ser	= 600grains (38. 89g.)
16ser	= 1 jing	= 20ounces, 1 pound 4 cunces (567g.)
2 jing	= 1 tártam	= 2½ pounds (1. 13kg.)
4 jing	= 1 ashak	= 5 pounds (2. 27kg.)
4 ashak	= 1 chārak	= 20pounds (9. 072kg.)
8 chārak	= 1 gilbar	= 160pounds (72. 58kg.)
8 gildar	= 1 batmán	= 1, 280pounds (580. 61kg.)

これらのうち、tártam は、他に検索を得ない不明のものであるが、jing すなわち斤を媒介として、中国より伝来したもの——正確に言えば、中国式とウイグル族の伝統的な衡単位の一一致したもの——と、ウイグル族旧来のもの——清朝治下で穀物税の徴収の際に採用されたもの——との両種の整合をみることができる。すなわち、実用例を見ないペルシア語の nukhūd (0. 2g) をのぞいて、以降 [Валиханов. p. 412] の述べる様に、фын (分)・мыскал (錢)・сар (両) そして16両=1斤に至るまで全く中国式重量単位と一致しているのである。ashak (ishak) 以上の chārak, galbir, batmán についても既述した。これらの両種は、斤を媒介として、垂直の体系に並んだのである。^⑪

おわりに

アジアの中央部にあったウイグル族の度量衡は、彼らの社会生活の一縮図である。イスラムとともに入ったペルシア・アラビア式度量衡、中国式、そしてロシア式。これらの単位の混在の仕方、導入の過程——時期と地域——のより詳細な検討から、一言一句に叙述

されたイメージとは別のウイグル社会史が展開すると思うし、しなければならないのではあるまいか。

註

- ① [回疆志。vol. 3] には、哈斯=2尺としているから、二つの係統の存続であろうか。
- ② 容量単位が、中央アジアで未分化であったことは、15世紀のヘラートについて述べた〔『使西域記』哈烈の条〕の、「斗斛を置かず、惟だ用ふるに衡を権す」という記事から知ることができる。今世紀のペルシアの度量衡を詳細に纏めた Rambton 女史も、容積単位については記述を欠いている〔Rambton, A. K., *Landlord and Peasant in Persia*, 2nd ed. Oxford, 1969. 邦訳、岡崎正孝『ペルシアの地主と農民』東京、1976. 邦訳の pp.404—411, 付録Ⅱ, 度量衡ならびに通貨〕。
- ③ [五体] の記述は、名称の存在を示してはくれるが、その体系・絶対値には疑問な点多すぎる。
- ④ ただし、taghar には量単位の用法はあった。山田信夫「イスタンブル大学図書館所蔵東トルキスタン出土文書類——とくにウイグル文書について——」(『西南アジア研究』20, 1968). pp.22. & 26.
〔張之毅。p.87〕に拠れば、1940年頃のアクスーでもこの「tahar」で計るやり方があったらしい。そこでは、1 tahar の米は重さで40斤に相当していたとある。
qap については、Yamada, N., *Four Notes on Several Names for Weights and Measures in Uighur Documents*, Ligeti, L., ed. *Studia Turcica*, Budapest, 1971. pp. 491—98, の第2章参照。
- ⑤ Yamada, N., *Uigur Documents of Sale and Loan Contracts Brought by Otani Expeditions, Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No.23, 1964, p.79
- ⑥ [Rambton, 邦訳前掲書, p.406] に従えば、ペルシアの1 chārak は1 mann の $\frac{1}{4}$ である。
- ⑦ ただし、特殊な商品 (ex. Kalawir) の売買には、4斤相当の chārak が用いられており、この値が存在したことは事実である [Forsyth, p.495]。
- ⑧ ただし、カーンガル区に属するヤルカンドの Guma で1 chārak=16斤の報告もある [Mannerheim, G.G., *Across Asia from West to East in 1906—1908*, Helsinki, 1940, II.p.81]。
- ⑨ [Kuropatkin. pp.65—66] 及び [Forsyth. p.495]
- ⑩ やや異常な値であり、あるいは Chinese pound=斤を意味し、結局は12.5斤の意味かもしれない。彼の報告は、ホタン地区での値である。
- ⑪ 東京大学東洋文化研究所大木文庫所蔵『葉爾羌莊名里数方向戸口糧賦布棉冊』(仮題)。
- ⑫ ghalbir と chārak がほぼ等しい値であった可能性は次の例からも傍証される。すなわち、[五体。10961] に1畝=bir albirlik yer (bir ghalbirlik yer, 1 ghalbir 播種の地) とあるが、[張之毅。pp.30—31] では小麦1 chārak は大体一畝に播種されるとする。勿論、地域差の存在は考慮せねばならないが、一応の見当はつけ得る。
- ⑬ [Radloff. IV. p.1516 には、カザン地方の bātman は 4 пуд (65.52 kg) としており、[Южахин, К.К., *Киргизско-русский словарь*, Москва, 1965, p.117] には、フェルガーナ地方で 4 пуд (65.52kg) ~ から16пуд (262.08kg), タラス河谷では 12пуд (196.56kg) としており、100kg. 未満の bātman も使われていた可能性がある。
- ⑭ 斤に近似したウイグル族旧来の重量単位は、何であったのか判らない。chaksä か、小さい bātman のいずれかであったろう。中国より導入された度量衡単位のうちでは、この斤がもっともウイグル族の生活に浸透していたようで、1870年代のウイグル婦人の家内工業製品はこの

18—20世紀, ウイグル族の度量衡について

斤を単位として取り引きされており〔Forsyth, p. 508〕, 日用品としての肉類も同様であった程である〔Forsyth, p. 496〕。

(補) ウイグル族は土地面積を播種する穀物量で表示していた。度量衡と称した以上, この面積単位も掲げるべきであるが, 筆者の別稿「18—20世紀ウイグル族の耕地面積」(仮題)と重複しており, 割愛した。